



# 悪心ざけ



saolipooh

## DIVE

---

ミッキーが 飛び降りた

ビルの屋上なら 飛び降りた

-----不況だからなあ

## 神さまのテレビ はじまり

---

神さま 悩んでいた

子どもたち（人間）のことで悩んでいた

どんなに救いの手を差し伸べてみても

おかしなことばかりする 子どもたち

おかげで腕がびよーんと伸びた

神さま 悩んでいた

また子どもたちのことで悩んでいた

どんなに耳を澄ましてみても

わがままばかり言っている 子どもたち

おかげで耳がぼろーんと伸びた

神さま 考えていた

子どもたちのことを考えていた

子どもたちの好きなもの

おねだり、やきもち、だだこね……テレビ!!

## 神さまのテレビ つづき

---

神さま 思いついた

とっても良いこと 思いついた

「神さまのテレビをつくります」

神さまのテレビ すごい

神さまのテレビ 世界一

高性能、高画質、とにかく……でかい!!

子どもたちは みんな見た

神さまのテレビ みんな見た

24時間 365日

神さまのテレビ すごい

神さまのテレビ 宇宙一

100%の視聴率

## 神さまのテレビ おわり

---

「人のためになることをしましょう」

その通り！

「むやみに欲しがらないようにしましょう」

まったくだ！

「みんな、聞き分けがよくなった」

神さま 大喜び

けれどまた

神さま 悩んでいた

子どもたちのことで悩んでいた

みんなテレビばかり見て

なんにもしなくなっちゃった

みんなテレビで教わったけど

なんにも実際にやろうとしない

神さまのテレビ もうすぐ終わり

いよいよ なんにも見えなくなるよ

ありす

---

フランフランみたいな雑貨店「ワンダーランド」。

ありすが、アルバイトすることになったところだ。

時給800円。

店長のドードー鳥が言うことには

「お客さまは、神様だ。笑え！笑え！」

ワンダーランドの客は、不可解。

とんでもなく急いで、ウサギのように跳んでいく紳士がいれば、

謎かけのような言葉で翻弄する、イモ虫おばさんもいる。

なかでも困ったのは、真っ赤な服の偉そうな、トランプのハートの女王様。

なんでも、かんでも、ありすに無償で要求する。

「これと同じものってないの？20個用意して。全部一つずつ包んで。そんな包装紙しかないの

？ちょっと、これ、汚れじゃないの？」

けれど、店長のドードー鳥が言うことには

「お客さまは、神様だ。笑え！笑え！」

神様なら、人権はないわけだ。

ありすは、女王様に、ぐさっと、ナイフを刺した。

「あんたらなんて、しょせん、かみ」

## つかの間の空

---

電車のなか 席が空いたので 座った  
私の前に 男の人が 立った  
彼の ジーパンの チャックが  
開いていて  
中から 空が 見えていた

マグリットが描きそうな  
爽やかで 鮮やかで べったりとした 青い空に  
白い雲が 浮かんで 流れる

じっと 見ていたら  
男の人は 移動してしまい 空は  
見えなくなった

あの青空は どこまで続くのだろう  
今も 続いているのだろうか

## スプラッタ

---

そうやって みんなの前 楽しそうに  
カノジョの話をしてるのを見て  
笑ってならなきゃならない役割  
いつまで続ければいいの  
「なかったこと」になった、みんなに秘密の恋は  
私の胸に囚われて逃げられない

傷つけたい 傷つけたい  
グロテスクに 血しぶき まきあげて  
トラウマという痕をつければ もう忘れさせない

2人だけのもののはずの恋  
1人離脱したら 憎しみに化けたんだ  
命がけギリギリの愛だったから あんたも命を差し出せ

傷つけたい 傷つけたい  
肉体のあるべき姿から切り離して  
二度と癒えない傷痕つけければ  
もう消させはしない



## フェイク

---

ある日、気がついたんだ。  
そう考えれば、全てのつじつまが、合うのだ。  
なぜ、私は、いつも本気になれないのか？  
なぜ、私は、いつも妥協してしまうのか？  
なぜ、私は、左利きなのか？  
全ての答えが、やっと、でたんだ。

私は、フェイク。  
右利きの本物は、どこかの森で眠っている。  
本物を見てつくられた、左利きの私は、  
本物が目を覚まさないように、  
見せかけの夢を追い、  
当たり障りなく生きて、  
うわべだけの恋をする。

真実の愛や、命がけの人生の目的なんていない。  
そんなものは、本物を目覚めさせてしまうだけ。  
フェイクの私は、消えてなくなってしまう。  
だから  
あなたは、人生を真剣に生きていない、  
そんな風に言われても、私は笑うしかない。  
私は、ただのお人形。  
本物は、眠れる森のなか。

まっしろ

---

やりたいこと  
なりたい理想像  
なにもない

ただまっしろになって  
なにものでもなく  
なにものにも染まらず

雪のように 降って 降って  
消えたい

染まらなければ 固有になれるかな

## 完璧な人間とできそこない人形

---

あるところに、できそこないの人形がおりました。彼女は、劇団の踊り子人形だったのですが、いつもステップは間違えるし、指示のないところで泣いてしまうし、まったくのできそこないでした。彼女は、他の人形と踊っても、ちっとも踊りを合わせられませんでした。そこで、いつもお客さんに笑われていました。劇団の座長にも、いつも怒られてしまいます。

「お前は、なんだってみんなと同じことができないんだ。ほら、またステップを間違えて！」すると、できそこない人形は、びっくりしてしまって、泣き出します。

「また、変なところで泣いて・・・お前は、本当にできそこないだよ」座長は、そう言って、いつも人形に辛くあたりました。しかし、人形は、高い代金で座長が買ったもので、もったいないので、ショーにはいつも、隅っこのほうで出ておりました。

同じ街に、完璧な人間がおりました。

彼は、銀行員として働いておりました。いつも冷静沈着で、間違いがなく、情に流されてマニュアルと違うことをするようなことは、いっさいありませんでした。彼は、与えられた仕事を完璧に仕上げ、嘘を言わないので、仕事仲間から絶大な信頼を得ていました。しかし、それは仕事のうえでの話で、いつも冷静で正しいことしか言わない彼は、面白味がないと、本物の友人といえるような人はおりませんでした。

あるとき、仕事仲間連れられて、完璧な彼は、劇団のショーに行きました。そのステージのはじっこに、他の人形と違う動きをしている1人の人形を見つけました。あのできそこない人形です。完璧な彼は、その人形をじっと見ていました。ショーが終わると、彼は、座長を呼び出し、できそこない人形を売ってほしい、と言いました。

「なんですって？でも、あれは、本当にできそこないの失敗作ですよ！」座長は、呆れて言いました。

「あとでやっぱり返すって言われても、お断りですよ」

「わかってる。いいんだ、あれで。譲ってくれ」

完璧な彼は、顔色一つ変えずにそう言うと、とうとう座長の言い値で人形を購入し、自宅へ連れて帰りました。

できそこない人形は、いつも怒る座長から離れることができ、とても嬉しく思いました。けれど踊り子人形なので、完璧な彼の前で、踊ることしかできません。しかも、その踊りさえ間違えるので、人形は、いつも申し訳なく思っていました。完璧な彼は、仕事が終わって家に帰ると、決まって人形の踊りを見ます。しかし、人形が踊っても回っても、足を踏み外しても、いつも彼は無表情で、良いとも悪いとも言わず、黙ってじっと見ておりました。

ある日、踊り子人形は、踊りの最中に足を踏み外し、転んでしまいました。人形は、悲しくなると泣き出しました。

「ご主人様、申し訳ございません。せっかく、この家に置いてくださったのに、私は、あなたの役に立ちそうにありません。私は、できそこないの人形なのです」

すると、完璧な彼は人形にゆっくり近づいて、無表情のまま話し出しました。

「いいんだ、君はそれで。私をごらん。いつも冷静で、間違ったことをしない。求められなけ

れば、笑ったり、泣いたりできない。完璧さ。でも、完璧な人間なんて、おかしいだろ。完璧だということは、人間として、できそこないということなんだ。私は、君と同じ、できそこないなんだ」

彼は、泣いたり、悲しそうな表情をしていませんでした。しかし、人形の胸には、彼の深い悲しみが伝わってきて、染み入るようでした。

それから、彼と人形は仲良くなりました。

毎日、人形が踊ると、彼は無表情のまま、静かに彼女の踊りを見守ります。彼女は、あいかわらずステップを間違え、転び、音楽と合いませんでしたが、一生懸命、最後まで踊ります。

二人は、幸せな日々を送っていました。

しかし、ある日、人形は、とうとう壊れて動かなくなっていました。もう間違えた踊りを踊ることもなく、無表情で、口も利かない人形を見て、彼は大変、悲しみました。彼は、人形の失敗や涙を愛していたのでした。

彼は、人形のために涙を流しました。誰にも求められずに泣いた彼は、もはや普通の人間です。動かない人形も、普通の人形にすぎません。そういうわけで、このお話も終わります。

とても悲しい夢を見た。

私は、お弁当を買いに外へ出たが、あまり心ひかれるものはなく、結局、店を出た。授業に間に合わない気がして、焦って車がたくさん路上駐車してあるところへと向かった。その車の列を抜ければ、学校まで早道で帰れると思ったのである。けれど、そこは車やトラックがぐちゃぐちゃと、不自然に絡まりあって停めてあり、私は、迷路の中に迷い込んだようになった。狭い隙間を縫って歩き、最終的には、腹這いにならないと進めなくなっていた。時間はどんどん過ぎていく。ここから引き返したのでは、もちろん、授業に間に合わないので、仕方なく、車のタイヤの間を這っていた。

ようやく光が見えて、体を起こすと、黒塗りの高そうな車の横に立っていた。そばには、車の持ち主らしき男が立っていた。ヒョロヒョロと細い、黒のスーツに黒のシャツを着た、全身真っ黒の男だった。おまけに、サングラスまでかけていた。私が横を通り過ぎようとする、「おい、それをどうする気だ」と彼は声をかけてきた。彼は、自分の車を指差している。恐る恐る、私は車を改めて見てみると、車の窓が割れていて、男は、私をにらんでいた。私は狼狽した。

「私じゃない、私は、近道をしていただけで、車の下は通ったけど、窓なんて割ってない！」通りすがりの人が、だんだん私たちの周りに集まってきた。男はサングラスの上の隙間から、疑わしげに私を見て、薄ら笑いを浮かべた。

「そうかもしれないなあ」

信じている顔つきではなかった。私は、名前やら住所やらを申告させられた。

学校まで、男はついてきた。既に授業が始まっていて、男は、私の担任の先生に詰め寄った。若くきれいな女の先生である。

そして、ここからが、この夢の、最も悲しい場面である。

男は、ひとまず帰った。しかし、私の気持ちは収まっていなかった。無実なのに、罪をかぶせられたことは、私の怒りを駆り立て、私は興奮していた。私は、先生に訴えた。

「本当に、私じゃないんです。あの男の、言いがかりなんです」

言っているうちに、胸がこみあげてきて、私は、声を出して泣いていた。

「私じゃない、私、やってない・・・」

そのとき、女教師は、厳しい目つきをして、高く、よく通るヒステリックな声を出した。

「泣くのはやめなさい」

空気が張り詰めた。

「まったく、こんなこと・・・早く、教室に戻りなさい」

明らかに、彼女は苛立っていて、私のことを信じていなかった。私の涙は止まっていた。泣くような気分が全くなくなってしまい、今度は、先生への憎しみが沸き上がった。こんなやつの前で、泣けるものか、と思った。

私は、教室に入った。一連の騒ぎで、もちろん授業は中断されていた。生徒たちはみな、私のことを蔑んだ目をして見ている。

私は今まで、優等生で、先生に反抗したり、不良のように威張った態度をしたことはなかったし、そんな行為は、非生産的で幼稚であることも理解していたつもりだった。しかし、私のそれからの態度は、今まで馬鹿にしていた、思春期特有の不良と呼ばれる彼らと全く同じものだった。私は、机の上に足を乗せ、腕組みをし、いかめしく先生を睨み付けていた。授業の終わりに、先生が、みんなのノートを集めるという。一番後ろの席の生徒が、自分の列の席を後ろから順々に回り、教室の前方の教壇までノートを集めることになっていた。私は、廊下側の一番後ろの席に座っていた。私は、イスから降りて、おとなしく他の生徒のノートを集めて、先生の前まで来ると、私は、ノートを先生の前で、勢いよく床へ叩きつけた。

私は、また泣いていた。今度は、自分の振る舞いの恥ずかしさに泣いていた。こんなことは、幼稚なことだと、分かっていたゆえに、泣いていた。胸を震わす感情の波に耐え切れなかった。非情な先生だとか、冤罪だとか、不条理だとか、そんなことは、頭のなかから消えていて、ひたすら哀しみだけが私を襲った。私は体を丸めて、床に座り込み、泣き続けた。ふと、泣きながら、母のことを思い出した。

声をあげながら、目を覚ました。

私は、ベッドの上で泣いていた。自分の家なのに、帰りたくなって、仕方がなかった。

## 新天地

---

緊張。心地よい緊張。心地よく感じる緊張。心地よくも悪くも緊張。  
心地よく緊張を強いる貴重な緊張。緊張の貴重さ。貴重な気もする緊張。  
貴重な均等な緊張。緊張のような均等な貴重。貴重な金曜の均等。  
均等の器用な緊張。金曜の貴重な緊張。気味が悪い奇妙な金曜。  
奇妙な均等の金曜の民謡。金曜の奇妙な均等な民謡の緊張。  
のような心持。

## バスに乗って

---

バスに乗って移動する

窓から見える景色で 至る所に死骸がある

あらゆるところで 私が死んでいる

だいたいが車にひかれている

首の骨を折って

不自然な形で曲がっている

口から血を流している

首がないこともしばしばだ

人に群がられて、なぶられているのもいる

道のあちこちに 私が死んでいる

四肢をバラバラにされている

静かに眠っているものの隣で

内臓を剥き出しにしているものもある

世界中で 私が死んでいる

それを バスに乗って 見ている



## ケチなレジスター

---

困ったことに、  
そのレジスターはケチだった。  
お金を飲み込むのは早いが、  
お釣りを出すのは嫌がった。  
とりわけ、一万円札なんか入った日には、  
渋って渋って大変だった。  
店長は大いに怒った。  
「なんだ、この役立たず！」  
ケチなレジスター、かわいそうに。  
その性格が不味かった。  
怒った店長に頭かち割られ、  
死んじゃった。

## 表情の叛乱

---

表情は、決意した。

主人に反旗を翻そうと。

怒りや悲しみばかり押し付けた

無能な主人のもとには、去ろうと。

表情は、主人から逃げ去った。

ほら、ごらん、

あの子の恐ろしいあの無表情！

君も表情に逃げられたくなかったら

気をつけることとしよう！

## 春の失恋

---

今年は、春が来るのが遅かった。

先週末は、柔らかい陽が出て、南風も吹き、すっかり春になったと思っていたのに、また春は姿を隠して、冷たい日々が続いた。原因は、春の失恋だった。冬に男を奪われたのだ。いつもは穏やかで優しい春が、今度ばかりはショックを受けて、泣いてばかりいた。だか、冷たい雨が降りつづき、三月になっても、冬は大威張りで雪まで降らせるしまつ。春はすっかり自信をなくして、やる気が出ずに引きこもっていた。

困ったのは気象庁。もう桜の開花宣言を出したのに、なかなか桜が満開にならない。どうにか春にやる気を出してもらおうと、一生懸命、みんなで考えた。そこで、この春から入社する予定の、内定者のイケメンくんを早くも呼び出して、春のご機嫌取りに行かせた。イケメンくんは、春の好みにぴったり合っていた。ようやく春は、やる気を出して、温かい日がやってきた。

ああ、よかった。

これで、イケメンくんが、色っぽい夏に心奪われるまでは、ひとまず、春は続くだろう。